

仏・ジャポニスムの原動力となった北斎

「芸術は盗作であるか革命であるか、そのいずれかだ！」

これはフランスのポスト印象派の画家ポール・ゴーギャンの言葉だが、江戸時代において、その言葉通り、日本画の世界に革命を起こしたのが葛飾北斎だった。

小さい頃から手先が器用だった北斎は十四歳で版木彫りの仕事に就いたのち十八歳の時、人気浮世絵師の勝川春章に入門。春章の一字を貰い、勝川春朗の名で役者絵を描くようになった。

だが、貪欲な好奇心を抑えることができない北斎は、師に内緒で狩野派の画法や司馬江漢の洋画を学び、それが発覚。春章の逆鱗に触れ、破門されることになってしまった。

絵を描いて食べていけるのは、幕府のお抱えの絵師だけといわれた時代。しかも、春章側からの目に見えない圧力で絵の依頼がパタリと途絶えてしまった。

生活に窮した北斎は妻とともに唐辛子や暦を行商。深夜に筆を走らせ、本の挿絵から役者絵や武者絵、果ては相撲画まで、内職になればと手当

たりしだいに描く日々が続いた。

当時、江戸では喜多川歌麿が描く美人画が話題になっていた。そこで北斎もそれに倣い美人画を描くようになる。芸は身を助けるとはよく言ったもの、途絶えていた仕事が入るようになった。

そんなある日、北斎が出合ったのはオランダの風景版画。当時鎖国中だった日本が唯一交流を持つオランダは、西洋でも最も風景画を愛した国だった。

北斎は風景や動植物のスケッチをベースに、そこに民衆の様々な表情

取めた『北斎漫画』を発表。「漫画」の「漫」には「広がる」という意味があり、北斎はその軽妙で自由奔放な筆で森羅万象を描いていった。

北斎漫画はその後、十二編まで刊行され、明治まで続くロングセラーとなる。しかも、西洋に輸出された日本陶器の包装紙には『北斎漫画』が意匠されていた。その包装紙を見た仏人の版画家はデッサンの秀逸さに驚き、画家仲間に興奮して伝える。北斎は西洋で空前のジャポニスム日本ブームが広まる一因となった。

墓が語る 一人の大事

瑞龜山誓教寺

葛飾北斎

一休、前田利家の甥・前田慶次、平賀源内、南方熊楠……いずれも奇人変人だが、中でも葛飾北斎は塵溜めに暮らし、引越すこと九十三度。名前を変えること三十度。仕舞いの名は「画狂老人」 という奇人変人振り。そんな北斎が一九九九年アメリカの雑誌「ライフ」から「過去一千年で最も重要な功績を残した世界の人物百人」に日本人としてたった一人選ばれた。世界は奇人変人に「鬼才天才」のレッテルを貼ったのだった。



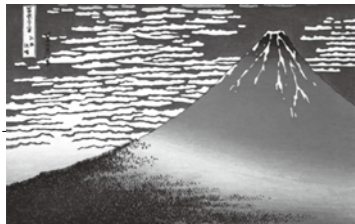
器、ねえのかよ？
それがどうした！
飯、何で食うんだ？
大きなお世話だ。
ひでえゴキだぜ？
気にならねえ！

かつしかほくさい ● 宝暦10年9月23日(1760年10月31日)？～嘉永2年4月18日(1849年5月10日)。武蔵国葛飾郡本所割下水(現・墨田区)の貧農の子として生まれる。幼名時太郎、のち鉄藏。浮世絵師・勝川春章の弟子となって春朗と名乗り画業専一。春章に破門されるも独自の道を歩み、文化2年(1805)初めて「葛飾北斎」の号を用いる。以後、数々の名を名乗り、最晩年は「画境老人」と号した。日本を代表する絵師。逸話が多すぎて紹介しきれないが、代表作は『北斎漫画』『富嶽三十六景』『千絵の海』『肉筆画帖』『富嶽百景』などだが、生涯3万点を超える画を残した。

また、多様なジャンルに挑む中、あえて新人を装って号を三〇回も変え、真の実力を世に問うた。中には「魚仏」「雷震」「九九蜃」「天狗堂熱鉄」「月痴老人」ほかあり、最晩年には「私は絵を描く気遣いである」と宣言、「画狂老人」と称した。

困苦から復活し描いた『富嶽三十六景』

世間に迎合することなく、自由気ままに描き続けた北斎。そんな彼の周りで不幸な出来事が相次いで起きたのは北斎が五十を超えの頃からだった。北斎は二度結婚し、先妻



『富嶽三十六景 凱風快晴』通称「赤富士」。

と後妻との間に一男二女ずつ儲けたが、長男と次女は早世、長女も離婚後若死。三女のお栄こそ絵師と離婚後、葛飾応為と号して絵描きとなり後世に評価を受けたが、北斎本人は脳卒中に。命に別状なかったが、次男の崎十郎が抱えた借金返済に奔走させられるなど、心労が絶えなかった。そんな中、絶望を抱え、折れそうになった心を引きずるような日々を送る

彼がふと目にしたのが、目の前に聳える富士山だった。瞬間、北斎の脳天に電気が走った。

磯はクヨクヨといったい何を悩んでいたのか！ なんて小さな人間なんだ。よし、命懸けでこの富士を描いてやる！

北斎の心は決まった。好きな絵を思う存分描く、という原点に立ち返った北斎は、筆を執り、その後富士山に幾度もなく足を運び、構図を練った。荒れ狂う波や鳥居の奥、桶の中から覗く富士、朝日に赤



瑞龜山誓教寺の正門。



誓教寺墓所に建てられた葛飾北斎の墓石。

『北斎漫画』八編「座頭と髻女」(1818年刊)。

もちろん北斎の画は『北斎漫画』だけにあらず、人物画をはじめ、歴史画、春画、妖怪画、百人一首、あらゆるジャンルに挑戦、それぞれが情念のこもる一級品として世に流布していたことは言うまでもない。

一日三回転居の奇人振り

さて、そんな北斎には変わった性癖があった。その一つが引越し魔として的一面だった。現存する文献によれば、その数はなんと九十三回。一日に三回も転居したこともあったと

く染まる神秘的な富士など、画中のどこに富士を配置すべきか計算し尽くし、多角的な視野から富士を描き切った。そして完成したのが、北斎芸術の頂点として後世に残る『富嶽三十六景』だった。つまり、人生最大の苦難こそが彼を原点に立ち戻らせ、連作を生み出させることになる。一大事だった、そう思えるのだ。

その後も富士を描き続けた北斎は、七十四歳で『富嶽百景』を完成させ、嘉永二年(1849)、「人魂で行く気散じや夏野原」という辞世の句を残し九十歳でこの世を去った。

北斎が眠る誓教寺は東京メトロ銀座線の稲荷町駅から徒歩三分。境内には北斎の銅像が立ち、次男の崎十郎が建てたといわれる墓柱には海外からの参拝者も多く、「画狂老人」墓」と刻まれた墓の案内板も英文の解説付きである。

浅草の聖天町・遍照院境内の長屋で「せめてもう十年、いや、あと五年生きることができたら、本物の絵描きになれるのに……」と言い残してこの世を去った北斎。モノやゴッホなど世界的な画家に大きな影響を与えた偉才は、死に際しても画に固執し、死にきれぬ思いだった。